

農林水産大臣賞受賞

集落型農業法人を主体とした全員参加による地域活性化

のうじくみあいほうじんながた
受賞者 **農事組合法人永田ホープフルファーム**
(秋田県 ^{かつのし} 鹿角市)

■ 地域の沿革と概要

永田地域（以下、「本地域」という。）を含む鹿角市は、総面積の約8割は林野が占める中山間地域である。一級河川^{よねしろ}米代川や支流^{おおゆ}の大湯川、熊沢川などが流れ込む花輪盆地に形成された扇状地を中心とする狭小平野から構成される。また、北には十和田湖、南には八幡平国立公園があり、緑と清流に恵まれた自然豊かな地域である。

本地域は、鹿角市の南端部、岩手県境に近い、山間地域に位置し、河川段丘や沢伝いに展開する平野は、水田地帯を展開し、台地はりんごなどの樹園地や、野菜などの畑に利用されている。

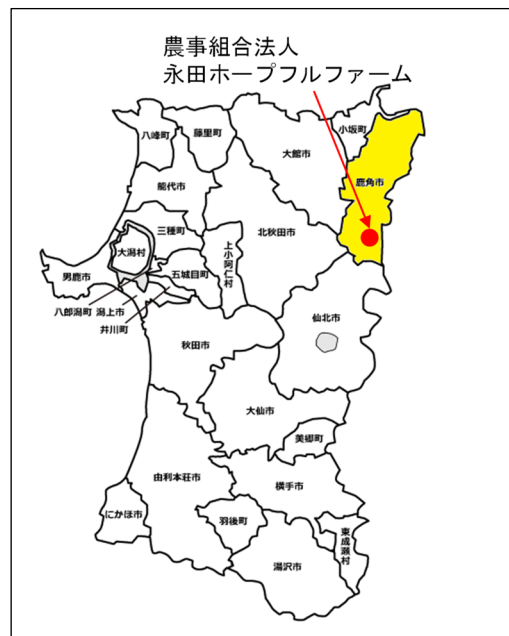
■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

鹿角市の南端に位置する本地域は、これまで個別経営を中心に営農を行ってきたが、農家数の減少と高齢化の進行により、集落機能の維持・農地の保全管理に危機感を持つようになった。

このため、組織的な営農と高収益作物（えだまめ等）の導入を検討し、品目横断的経営安定対策等に合わせて、平成19年に永田集落営農組織を設立した。その後も地域運営の話し合いを続け、合意形成により、平成21年に農事組合法人へ移行し、営農及び地域活動の強化を図っている。

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	大字単位の集団等
地区の性格	機能的な集団等
農家率 (内訳)	73.5%
	総世帯数 34戸
	総農家数 25戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 1戸
	1種兼業農家 4戸
	2種兼業農家 13戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 77ha
	耕地面積 49ha
	田 38ha
	畑 11ha
	耕地率 63.6%
	農家一戸当たり耕地面積 2.0ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 農事組合法人の設立に至った動機、背景

本地域では、昭和 51 年に集落内の兼業農家 15 戸が「永田生産組合」を組織し、ミニライスセンターとコンバイン 2 台を導入して、共同で収穫と乾燥・調製作業を行っていたが、農家数の減少と高齢化の進行により、将来的な集落機能の維持や、農地の保全管理に危機感を持つようになった。そうした中、集落機能の維持のためには、効率的な生産体制を確立して体質強化を図り、農業所得を確保していくことが重要と考え、平成 19 年 3 月に集落内 18 戸が参加し、新たな任意組織として「永田集落営農組合」を設立した。

設立後も、更なる組織力強化に向けて、3 年後の法人化を目指した地域の話し合いを進め、関係機関の協力を得ながら、平成 21 年 3 月に任意組織を法人化し、「農事組合法人永田ホープフルファーム」(以下、「法人」という)を設立した。

イ 地域還元できる品目の検討と実践

本地域は、農家の殆どが兼業農家であり、労働力に制約がある中で、効率的な営農体制を整えるため、集落全体で生産活動に取り組めることに加え、労賃を地域に還元出来ることを前提に、複合経営の検討を行った。当初は、耕地と労働力の効率的な利用を考慮し、地元の農業協同組合との契約によるスイートコーンの生産と、補完品目として選定したカボチャ、そば、えだまめの作付けを行った。スイートコーンは、品種の組み合わせ等により長期出荷を考慮したものの、気象条件によって生育にバラツキが生じ、収穫期間中に 2～3 日程度の空白が発生するなど、労働力を有効活用できず、十分に地域還元出来なかった。また、カボチャや、そばについては、転作田での作付けであり、排水不良による影響を受けやすく、安定生産には課題が多かった。

このように検討を続けた結果、高収益作物で、品種の構成によって作期に幅が広がること、機械化体系が確立されており、耕地と労働力の有効活用に適していること、県や市の重点推進作物であり、支援事業が充実していたことなどを事由に、えだまめを主力品目と



写真 1 えだまめのほ場

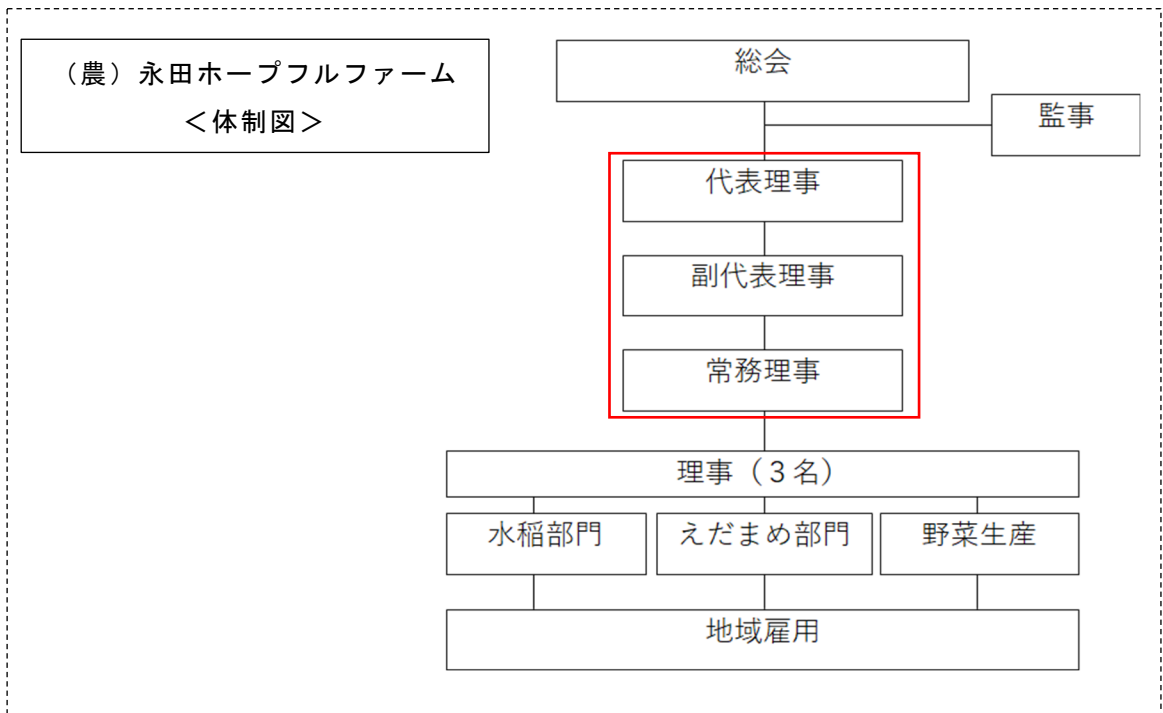
することにした。

(2) むらづくりの推進体制

ア 組織体制、構成員の状況

法人は、地域内の農家 25 戸のうち 18 戸により構成され、下図の体制により業務を行っている。

役員の役割分担として、代表理事は管理運営及び統括、副代表理事は機械管理統括、常務理事が現場統括を担当し、各理事をチームリーダーとして部門ごとに作業を分担している。



第2図 むらづくり推進体制図



写真2 スタッフの集合写真



写真3・4 簡易地下かんがいと、えだまめのほ場

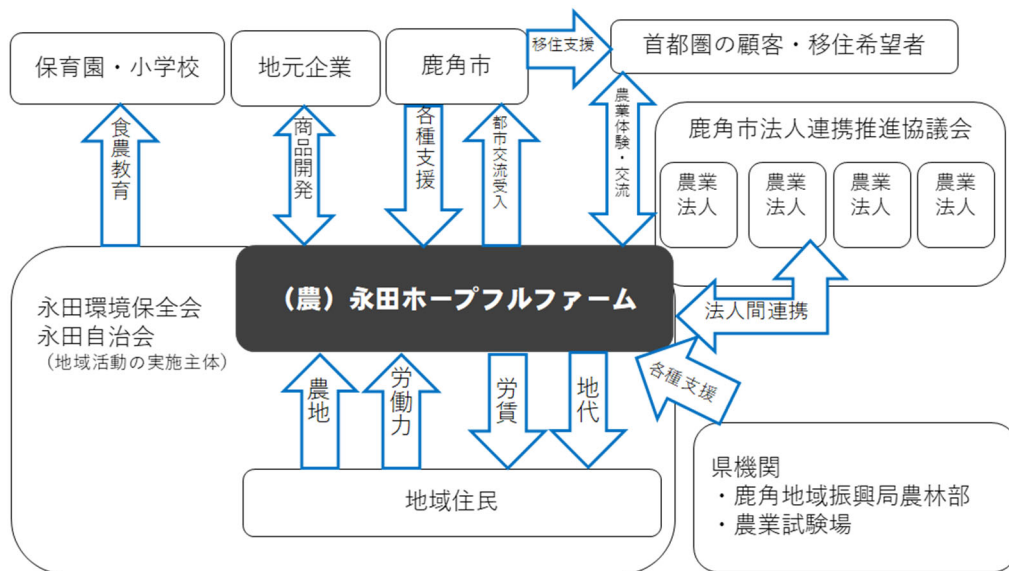
イ 連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

本地域の各種行事や活動の実施主体である永田自治会のうち、環境保全活動を担当する「永田環境保全会」は、会員の多くが法人の構成員にもなっている。永田環境保全会が中心となり、水路の泥上げ、水路の清掃、草刈り等により生産基盤の維持と質的向上を図っている。また、行

政機関と連携し、移住推進の施策や移住体験ツアーを受入れている。

ウ 関係組織、団体との関係及び参加状況等について

鹿角市内の4つの農業法人とともに、「鹿角市法人連携推進協議会」を設立し、地域内の高齢者施設や宿泊施設、学校給食センターへの農産物を供給しているほか、地域の商談会に出品し農産加工品のPRを行うなど、市全体の農業の活性化を牽引する役割を担っている。



第3図 関係組織、団体との連携図



写真5 ミニライスセンター



写真6・7 冷凍えだまめと商談会

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

本地域は農業を軸足とした地域運営をしており、経営面積は、（平成21年）21haから（令和2年）32haに拡大し、地域内農地の大部分を法人が担っており、作物別面積は、水稻、そば、えだまめ、カボチャ、スイートコーン、施設野菜等の順で、「水稻＋野菜」の複合経営が行われている。

主力品目である「えだまめ」については、簡易地下かんがいを導入

し、排水対策も行い、安定収量を実現している。

また、地元企業（新冷凍技術）と連携して「冷凍えだまめ」として商品開発し、県内外に地域ブランドとして好評を得ており、インターネット（Web）でも販売している。冷凍えだまめの加工に当たっては、地元女性を雇用し、手作業を多く行うことで高品質を確保している。

2. 農業生産面における特徴

ア 農業生産の取組状況

経営規模は、21ha（平成21年）から32ha（令和2年）に拡大し、地域内の農地（49ha）の大部分を法人が担っている。作付品目と面積構成は、水稻21.2ha、そば3.3ha、えだまめ6.7ha、カボチャ0.5ha、スイートコーン0.2ha、施設野菜等0.1haとなっており、「水稻＋野菜」の作付体系が定着している。

イ 生産の組織化と複合化による生産構造の改善

古くから、本地域の農家の殆どは兼業農家であり、作業時間や労働力に制約があり、限られた労働力を効率的に発揮する必要があった。

平成19年の任意組織設立前の「永田生産組合」は、実質的には機械利用組合であり、個人毎、ほ場毎に収穫、乾燥・調製を行う方式で、決して効率が良いとは言えない状態であった。その後に組織した「永田集落営農組合」でも、農地を個々に管理しており、組織化による作業の効率化は図られていなかった。

その後、法人として経営を開始するに当たり、集落営農のモデルとなる法人経営を目指し、経理事務を行うパソコン等事務機器の導入や、複合経営に向けた生産技術、経営管理手法の確立や、直売所の運営に関する研修活動や、複合品目の選定においては、えだまめに取り組んでいる。作業に際しては、

「全員参加のえだまめ栽培」をモットーに、兼業農家の構成員が出勤前に機械で収穫し、収穫した枝豆を午前中に集落の女性等が選別・調製作業を行うことで、限られた労働力でも昼には出荷出来る、効率的な体制を構築し、作業体系を改善している。



写真8 えだまめの選別作業

また、えだまめを補完する品目として、ほうれんそう、せりといった施設野菜を導入することで、周年での雇用体制を整備し、非農家を含めた集落住民の安定的な就業機会の確保につなげている他、収益の一部を従業員への給与として地域に還元することで、地域住民の生活の安定・質的向上にも貢献している。

ウ 地元加工業者との連携による農作物の付加価値向上

「全員参加のえだまめ栽培」により、鮮度の高いえだまめを生産出来るようになったことにより、地元にある食品加工業者と連携し、えだまめの美味しさを損なわない冷凍商品の開発に挑戦した。

品種は、食味が優れる県オリジナル品種の「あきた香り五葉」や「あきたほのか」を使用し、風味を損なわないCAS（急速冷凍）の採用により、美味しさにこだわって商品づくりを行った。

商品は「日本一おいしいと言ってもらいたいえだ豆」とパッケージへ題名し、首都圏の業者と契約販売しており、食味の良さや調理の簡便さから、取引業者から高く評価されている。この取り組みは、地域産品の評価の底上げにつながっており、経営モデルとして、地域内外で注目されている。



写真9 冷凍えだまめ
(パッケージ)

3. 生活・環境整備面における特徴

ア 地域の生活・環境整備面の取組状況、女性の社会参画の促進状況

「永田環境保全会」（法人と構成員同じ）が中心となり、集落全戸が参加して、水路の定期点検・清掃・泥上げ、草刈り、水質のモニタリング等を行うことにより、生産基盤の維持と質的向上を図っている。

また、小学生を対象とした田んぼの生きもの調査や、地元幼稚園児を対象とした農業体験を実施するなど、世代間交流や食農教育の場として機能している。

多面的機能支払活動に当たっては、スイセン球根の植栽や、集落内の神社の祭典と合わせた清掃活動など、別途、軽作業を計画し、多くの女性が参加出来るよう配慮している。これらの活動の推進により、地域内コミュニティや結束を強めている。



写真10 多面的機能支払の看板



写真11・12 スイセンと、植栽場所の草刈り

イ 都市住民との交流への寄与状況、地域への定住促進

地元出身の首都圏在住者や、取引のある顧客を対象として実施したえだまめ収穫等の農作業体験や、集落の空き家を活用した「きりたんぼ鍋」作りの企画等は、参加者から好評を得ており、都市住民と地域住民との交流を創出しながら、関係人口の増大に寄与している。

この活動においても、集落の女性のセンスを採用し、参加した都市住民に対して、女性の視点での情報発信をしており、様々な活動も通じて、本地域の魅力を再発見する場になっている。



写真 13 きりたんぼ作りの体験



写真 14 集落の女性による花の植栽

鹿角市では、都市部からの移住促進に向けて、移住業務を専門とする地域おこし協力隊を「移住コンシェルジュ」に任命し、相談会やソーシャルメディアでの情報発信、体験ツアーなどを行っている。

なお、法人では、移住コンシェルジュとの連携のもと、旬の農作物を紹介するなど、農業に親しみをもちてもらうための情報発信をしている他、体験ツアーのコースの一つとして、法人の農地や施設を利用した、えだまめの調製作業やスイートコーンの収穫体験等、季節折々のメニューを実施している。

本地域には県外から移住してきた若者が2名おり、将来的には地域内での就農を目指している。法人では、営農や地域行事への参加を働きかけ、将来の担い手として育成を図るとともに、今後は給与体系や社会保障を整備し、若者が就業先として選択しやすい環境を整えていくこととしており、農業生産と加工・販売を中心とした取り組みを推進している。



写真 15 幼稚園児との田植え体験（交流）



写真 16 えだまめ袋詰め作業の若者